

日本プロ野球はメジャーリーグベースボールを目指すべきなのか

スポーツマネジメントゼミナール 1314002 市瀬 麻矢

1. 研究動機・研究目的

現代において広く日本人に愛され親しまれている野球は、1870年代にベースボールとしてアメリカから輸入された。「野球」という言葉は、「Baseball」の日本語訳として使われており、この2つの言葉に明確な使い分けはないと考えられる。ところが Whiting(1991)は、「一見したところでは、日本の野球はアメリカのゲームと同じようにみえるが実は違う。」「日本人の生活観がスポーツのほとんどあらゆる面に浸透している。」と述べている。このように、野球は日本で日本独自のスポーツとして発展し、時にベースボールとは異なるスポーツを指す言葉として使われることもあると考えられる。

ところが近年、日本プロ野球機構(NPB)では、様々な面でアメリカメジャーリーグベースボール(MLB)を目指すとする動きが見られる。日本独自のスポーツとして発展したと考えられる野球というスポーツは、全てアメリカのベースボールを目指せば良い方向に向かうのだろうか。

競技のルールブックだけでは説明することができない違いがある2つの言葉の相違点を明らかとし、日本の「野球」はアメリカの「ベースボール」を目指すべきなのかについて検討することを本研究の目的とした。

2. 研究方法

本研究は、ベースボールと野球、また日米両国の文化に関連する書籍、新聞記事、雑誌記事、インターネット記事を調査対象とした文献研究とした。ベースボールと野球の現状比較や、今後の展望については両国のプロリーグであるMLBとNPBを研究対象とした。

調査項目は以下の7点とした。

- 1) ベースボールの歴史について
- 2) 野球の歴史について
- 3) ベースボールと野球の相違点について
- 4) メジャーリーグベースボール(MLB)の現状と取り組みについて
- 5) 日本プロ野球(NPB)の現状と取り組みについて
- 6) 日米両国の文化について
- 7) 日本プロ野球はアメリカメジャーリーグベースボールを目指すべきなのか

3. 主な結果と考察

アメリカから日本に渡ってきた「ベースボール」は、外来スポーツとしてそのまま日本人に親しまれたわけではなく、様々な時代背景や日本人が作り出した文化の中で、「野球」という日本のスポーツとして独自の発展を遂げてきたことが分かった。またこの2つの言葉は、誕生、発展、そして波及の経緯に大きな違いがあることが明らかとなった。

ベースボールは、「遊び」や「娯楽」として生まれ、アメリカの自由と平等を大切にした風土の中で、「市民スポーツ」の意味合いを強く持って発展した。一方日本では、輸入されたベースボールに新しく野球という名前を付け、すぐに学校に取り入れられ、「教育」の中で「学生スポーツ」として発展した。

その結果、人々の娯楽としての「National Pastime」と言われるベースボールと「武士道精神」が流れていると言われている日本の野球には大きな相違点が生まれた。

また MLB と NPB には、プロフェッショナルスポーツリーグとしての組織体から球団の所有、管轄団体、各制度まで様々な違いが見られた。特にコミッショナーの権利の違いによる権利処理構図の相違が両組織の各制度や、サービスの違いに繋がっていることが明らかとなった。その根本には、「ベースボール」と、「野球」のスポーツとしての大きな違いがあり、選手のプレー意識から観戦するファンの楽しみ方、経営側のビジネス意識にまで影響を与えていると考えられた。

4. 結論

「ベースボール」と「野球」にはその発展の違いから、スポーツとしての様々な違いがあることが明らかとなった。この違いは両国のプロリーグである MLB と NPB にも大きな影響を与えている。

MLB と NPB を比較すると、その収益や選手年棒の差、リーグシステムの違いは明らかであった。それに対し未だスポーツビジネスが盛んではない日本は、アメリカに倣った「ビジネス」としての視点をもった改革を進めるべきだと考えられる。しかしながら、「ベースボール」と「野球」が異なる以上、NPB と MLB の 2 つの組織体は全く同一のものになることは出来ないと考えられた。またベースボールと野球は、どちらが良い、どちらが優れていると決められるものではなく、NPB は必ずしも MLB を目指す必要はないと考えられた。様々な施策や、日本人の「野球離れ」を止める対策を立てる前に、まずはもう一度日本生まれのスポーツとしての「野球」を見つめ直し、今後向かう方向への地盤を固めることが必要だと考えられた。

長い間日本の野球人が作り上げてきた「武士道」の精神が宿る野球に、アメリカのスポーツビジネス的思考を加え、より人々に愛され、球場が活気で溢れるようなプロスポーツを目指すべきだと本研究では結論付けた。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、指導教授の小笠原悦子教授に心より感謝申し上げます。最後まで個人のやりたいことを推奨して下さり、お忙しい中毎週ご助言ご助力頂きました。本当にありがとうございました。

また、助け合い共に卒業論文を書き上げた同じスポーツマネジメントゼミナールの皆さんにも感謝申し上げます。ありがとうございました。